

# 多摩デポ通信 第52号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2019年11月10日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP / <https://www.tamadepo.org/>

●E-Mail [depo\\_tama@yahoo.co.jp](mailto:depo_tama@yahoo.co.jp)

第37回多摩デポ講座

## 水濡れから本を守ろう、 本を救おう！ ～災害多発の今、知っておきたい知恵と技～

講師：眞野 節雄 氏

JLA資料保存委員長（都立中央図書館 勤務）

- ・日時：12月7日(土) 午後6時30分～9時
- ・会場：国分寺労政会館 第3会議室（3階）  
（JR国分寺駅南口徒歩5分）
- ・参加費：500円、事前申込不要（会員外でも、どなたでも参加できます）

眞野氏は都立図書館で長年、本の修復に携わってこられました。講座では簡単な実技も交えて、予防対策から水濡れ資料修復法と心構えを学びます。



眞野節雄 編著  
JLA Booklet no.6  
日本図書館協会  
A5 70p  
定価 1000円（税別）  
ISBN978-4-8204-1907-5

この秋、立て続けに台風が襲来し、各地で水害などが発生しました。被害にあわれた方、図書館にお見舞い申し上げます。  
ここ数年、各地で地震、風水害、火山噴火などの自然災害が相次ぎ、日本が災害多発列島とあらためて実感し、家庭でも職場でも、備えを日頃からしておく必要を考えた方は多かっただと思います。危機感が高まる今を、対処方法を知るチャンスにしたいものです。

この秋の水害では、図書館も全国で約百館が水害にあいました。東京都市大学（世田谷区）は図書館の地下部分が水没しました。地下には約9万冊強の蔵書があつたそうです。また、一橋大学（国立市）は屋上から水が入り、約1～2万冊が濡れたそうです。白鷗大学（小山市）は過去の被災経験を活かして、地下にはできるだけ資料は置かないようにしていました。さらに避難していた学生が地下1階の資料約2万冊を2階にあげて難を逃れました。今回驚いたのは、各地に

まだ避難所があるような被災後間がないうちから、新聞各紙が図書館の被災状況を大きく報道し、合わせてそれへの対処方法を紹介したことです。例えば朝日新聞は10/20地方版、東京新聞は10/28朝刊の一面トップで「本のいのち 救いたい」、さらに社会面で「都立図書館 むれた本救済マニュアル」と具体的な方法を紹介しています。日経は10/28夕刊で取上げ、「蔵書を守るための対策が手薄な図書館は多く、国も対策に乗り出す方針だ」と文科省に取材しています。

『水濡れから図書館資料を救おう!』10月刊行  
眞野氏は都立図書館の資料保全室に長年、勤務され、日本図書館協会資料保存委員会委員長などでも活躍です。それらの経験を専門家だけのものとせず、広く知ってほしいと、都立図書館のホームページ「資料保存のページ」に解説や動画を公開しています。それらのうち、水濡れ対策をまとめて、JLAブックレットシリーズで出版されました。この本では災害で資料が受ける被害には色々ありますが、想定するべき優先順位は圧倒的に水損⇨水濡れだと指摘し、その対処を予防も含めて、懇切丁寧に解説しています。目次もブックレットにしては細かく、それもマニュアル本として実践に使いやすいようにという眞野氏の配慮からです。

特に目からウロコなのは、東日本大震災の津波で泥にまみれ固まった本の修復過程で、試行錯誤しながら、驚くほど復元できる技術を開発したことです。いざという時の行動マニュアルや「被災資料救済セット」リストなど、即実践できるノウハウが盛りだくさんです。参考になる連絡先、文献、サイトの紹介も豊富です。今回の多摩デポ講座では簡単な実技も交えて、図書館職員だけでなく、市民一人一人が知っておくと、いざという時に役立つ予防対策から水濡れ資料修復法と心構えが学べます。ぜひプロの技を間近で見て、図書館で家で大切な本や書類を守りましょう。

養田明子（事務局）



全公図の全国実態調査と  
多摩デポ講座報告

堀渡（事務局長）

### ①講座の実施報告

8月5日（月）の午後6時30分～9時、国分寺労働会館第三会議室にて、「公立図書館の除籍と保存、共同保存の実態―『公立図書館における蔵書構成・管理に関する実態調査報告書』（全公図）を読みながら―」と題して、第36回多摩デポ講座を開催しました。全国公共図書館協議会（全公図）が昨年度に同名の全国実態調査を行い、今年3月にその調査報告書を発表しています。この調査の意義に注目し、調査内容から読める現状を一緒に学ぼうと企画しました。

講師は星野翼氏（埼玉県立久喜図書館）と伊藤民雄



氏(実践女子大図書館)に依頼。星野氏は同報告書の編集委員で、伊藤氏はこの調査の助言者をされた方です。報告書は全公図の事務局が置かれている東京都立中央図書館のホームページで公開されています。講座では抜粋のプリントを参加者に配り、講師に解説してもらった形で行いました。参加は24人でしたが、遠方からも含め多様な職員(及び元職員)の方が集まりました。

## ② 調査報告書の概要

報告書は本文の全6章と、調査票見本の付録から成っており、全102ページ。章立ては、第1章 図書館基本構想、第2章 収集(資料選択)、第3章 蔵書評価、第4章 除籍、第5章 保存、第6章 都道府県域での資料保存の取組、となっています。

冒頭の「はじめに」には、まず「:毎年増え続ける蔵書への対応を迫られ、保存スペース(書庫)狭隘化の問題を抱える図書館も増えており、どのような資料・情報を収集し保存するかというところが、公立図書館共通の課題となっている」と問題意識が書かれます。そして二か年かけて「公立図書館における蔵書構成・管理」の調査研究に取り組むことにした。過去の類似調査では、「蔵書構成プロセス

中の『資料選択』に関わる調査が多く、とりわけ収集方針や選定基準を策定しているかどうかに関心の中心」だった。しかし今回は、「資料選択のほか、蔵書評価、除籍、保存、都道府県域での資料保存の取組など幅広く取り上げることとし、初年度の平成30年度には全国の公立図書館の実態調査を実施した、と書かれています。

ですから章の並びでは第3章以降が、この調査で初めてアプローチされた全国の実態と言えます。また(全国で公立図書館を設置している)都道府県47、市区町村1332に調査票を送り、全都道府県と1326の市区町村から回答があった、回収率99.6%とのこと。その非常に高い網羅性は驚きで、議論の出発点に使えると評価できます。

## ③ 見えてきた実態から

2時間半の時間だけでは主には報告書の概要紹介にとどまり、立ち止まって全国実態や図書館の実情を推測したり、意見交換をすることまではあまりできません。深い分析は各自の宿題になりましたが、その場では以下のようなことが指摘されました。

- ・ 成文化された除籍基準を持つ図書館は多くなったが、一方でそれを公開していない館がかなりある。それでいいか?(選書基準の公開の仕方との乖離)。
- ・ (判断を含む) 除籍実務を担当するのが正規職員ではない図書館がかなりあるという問題。
- ・ 既に大半の図書館が書庫スペースの限界が近いこと、しかしその先の対策、方針がないこと。

・全体として、全国の図書館で大変心もとない除籍と保存の実態が見えたのではないか。やはりそうか。

・建築ラッシュと言われた時期から大半が開館後数十年たち、書庫その他の保存スペースがどこも限界を迎えつつある図書館の現在を示している……など。

参加者の内訳は会員14名、会員外10名。現役職員と受付で肩書を書いてくれたのは、多摩地域の市立図書館5名、23区の区立図書館1名、県立図書館および県生涯学習課職員計3名です。会員でない方も多かったです。現役職員の方たちは何をもち帰れたでしょうか？

#### ④ 講座後の理事、事務局員の議論から

その後の事務局会議、理事会では以下のような話が出ました。

・書庫など保存スペースが限界を迎えて飽和状態にある公立図書館の姿が明らかになった。

・全国共通の問題。課題として直視しなければならぬ。どう向き合い解決していくか。図書館共通の持続可能性の問題なのにオープンな議論がいっこうに起こらない、図書館界の危機なのではないか。

・この調査報告には図書館関係者をもっと注目するべきだ。多摩デポでも継続し



て研究する必要があるのではないか。

・その中で、調査し（短い）結果を整理してもらえた、県域での共同保存の取り組み（第6章）が注目できる。ここにはこれまで知られていなかった幾つかの県の取組みも上がっている。

（報告書では県名が入っていないかったので）講座では講師に具体的に県名を教えてもらったが、「書籍に関する共同保存の取組」には、初めて知ることができた三重県、京都府もあった（それ以外は、以前から知られていた富山県、滋賀県、愛知県、埼玉県。また体制を作り以前から取り組んでいるのは岡山県が、なぜか回答から抜けていることも分かった）。

・第6章部分は、もっと丁寧に紹介され、さらに踏み込んで調査された方がいい。具体的なノウハウが明らか

にされ、全国が学べるといい。そういう促しが行われている。

・編集委員会と全公図の、今後の踏み込んだ活動に期待したい。

多摩デポからは、まず要望書を出そうということになりました。

#### ⑤ 要望書の提出について

多摩デポでは全公図に対し、今回の全国調査の意義への賛意と謝意を表明し、追加調査の必要と、課題解決のための政策提言の要請を求め、以下のような要望書を送る予定です。

『公立図書館における蔵書構成・管理に関する実態調査報告書』について（要望）

日頃、公共図書館の振興のために活動されていることに敬意を表します。私共

は、東京都多摩地域に2008年に発足したNPO法人です。公共図書館の利用者への資料提供を充実・発展させるため、一度は収集した資料を地域全体でしっかり保存していく仕組みを作ろうと、現在まで活動を続けております。

本年3月31日付で貴会が発表された本報告書は、これまでアブローチされてこなかった、全国の公立図書館の蔵書構成と管理の実態を明らかにする端緒を開きました。特に除籍と保存、県域での共同保存に関わる調査項目は重要です。それは私共に参考になるばかりではありません。開館後かなりの時間が経過し、蔵書の保存スペースが限界を迎えつつある全国の図書館にとって、次の共通の課題を見出せる調査でした。そこでさらに、下記の通り要望いたします。

## 記

- 1 2018年度の調査を踏まえ、追加の調査を行っていただきたい。
  - 2 ここには、次の①②③を調査項目に加えていただきたい。
  - ①第4章には、除籍基準を明文化しても公開はしていない図書館が多く見受けられます。その理由はなぜか。
  - ②具体的な保存環境・設備について。
  - ③「都道府県域での資料保存の取組み」は事例が少なく、かつ先端的な取り組みなので、ぜひさらに詳細な調査を行ない、個別に紹介していただきたい。
  - 3 全公図として、「公共図書館にとって除籍と保存が重要な課題となっていること」を注視するよう提言していただきたい。
- さらに、各県域において都道府県立図書館の役割は、

市町村図書館への協力・支援であり、広域行政の視点からも同様である。「資料の共同保存体制の取組み」は、図書館における資料提供の拡充を図るうえで重要な責務と考えられる。全公図として今回の調査から得た実態を見ての提言として「共同保存の取組みを各県域で都道府県立図書館が要となつて」進めるよう、強く提言していただきたい。

### ▼全公図が行った調査の意義▲

○今回の調査は全国悉皆調査と言える程の回収率です。この結果が今後、保存・除籍・共同保存の問題を考える際の前提になっていく必要があると思います。

○特に多摩デポの課題にとつては、「県域での共同保存の取組み」(報告書の第6章部分)が重要です。

○例えば日本図書館協会が出版した『図書館情報資源概論』(JLA図書館情報学テキストシリーズIII-8)という教科書があります。その「U43分担保存」の節(p226)には大学図書館や公共図書館の書庫や分担保存、共同保存のことが書かれ、我が「多摩デポ」にも9行触れているなど、教科書としてはユニークな面もあります。

○しかし2012年の初版だけでなく昨年末に出た新訂版でも県立図書館の共同保存の説明は滋賀県、富山県の例に終始しています。

○また「多摩デポブックレット⑭」で塩見昇氏も滋賀県の例から語っておられました。それが私たちの常識だったので、実際には中部、関西の県立図書館では、さらに幾つかの動きが始まっていたのでした。

(H)

・ISBNなし資料の同定  
識別のための実験  
・TAMALASの改良

★多摩川関係資料の書影  
撮影を実施

TAMALAS（多摩地域公共図書館蔵書確認システム）が実用化している現在、次はISBN（国際標準図書番号）が付与されていない資料（以下、「ISBNなし資料」と書きます）の蔵書確認の方法が課題だと考えています。

「ISBNなし資料」は、各図書館で独自に書誌を作っている場合が多く、目録の取り方に統一性がなく、複数の自治体を横断検索すると書誌割れしていることが多くあります。検索してヒットした資料群のうち、

どれとどれが同一の資料なのかを判断する（同定識別）が必要です。正確に言うと、現物を見なくてもデータ上で同定識別できないか？が課題となるわけです。

この同定識別に（データに書影があること）が大いに役立つようになるのではないかと考えています。

8月27日に調布市立図書館の協力を得て、同市の中央図書館の蔵書中、「多摩川関係の資料」約400冊の表紙、背表紙、裏表紙の書影データを採取しました。



（株）カーリルが開発したオープンブックカメラ（資料を置くと、自動的に表紙、背表紙、裏表紙の三方が一度に高速で撮影される仕組みの機械）を使って撮影を行いました。

撮影データを持ちかえったカーリルでは、得られた書影を調布市立図書館の書誌データに付加し、多摩川関連資料の書影付きデータベースを作成しているところです。

「多摩川関係の資料」を使ったのは、それが多摩地域の公立図書館にはどこでもある程度は共通に所蔵し、かつ「ISBNなし資料」が多いと考えたからです。カーリルで作る上記データをもとに、今後他の図書館が所蔵する「多摩川関係の資料」と突合し、書誌を同定できるかの実験を行う予定です。同時に、同定した資料を当該館の書誌情報と



付け合わせ、書誌情報に不備がないかの確認もしていきたい。実験を通して最終的には「ISBNなし資料」の書誌の統一化への道も開きたいと考えています。

★TAMALASの  
システムの改良

3月に実施した「TAMALAS個別処理システムの活用に関する調査」に各自治体から寄せられた意見を元に、システムの使い勝手の改良を行いました。

まず、TAMALASのトップ画面を改良し、個別処理と一括処理（＝画面では「まとめて処理」と表示を変更）の入り口を同一画面に置き、そこから切り替えられるようレイアウトしました。

検索結果の表示も見やすくしました。所蔵がある館は、青色の下地で表示します。都立図書館が所蔵する場合は、紫色の下地。検索時にネットが繋がらなかった館は、灰色の下地です。さらに灰色の下地をタップすると「検索できませんでした」を表示することになりました。

また今までは、バーコードリーダーを使う時には半角入力の設定が必要でしたが、ただバーコードリーダーを接続してもらえばISBNを読み取れるようになりました。アスタリスク等の文字列が含まれる場合や日

本語入力モードの自動切換えにも対応できるようにしました。

ISBNの表記の揺れにも対応しています。10桁と13桁のどちらも可能ですし、小文字のxにも対応。かつ全角入力でも検索できます。

スマートフォンへの対応も強化し、スマートフォンでも使い勝手のよい画面を作りました。スマートフォンでバーコードリーダーに接続すれば、書架の間を移動しながら検索することもできそうです。

処理速度も高速化しています。試してみてください。

今後も指摘される意見を組み入れ、多摩地域で共同保存をしやすい環境を整備していきます。

1画面にまとめました。  
・個別処理  
・まとめて処理

使う方のタブをクリック



メンバーリストの  
サーバーが  
変わりました

多摩デポでは会員相互の情報交換と事務局からの連絡を目的として、以前から電子メールが一斉送信できるメンバーリストを活用しています。ところが2014年3月から利用していたサーバーの「Free!」が12月1日でサービスを終了することになりました。

そのため後継として、ホームページ管理で利用しているさくらサーバーのサービスに切替えることにしました。既に10月末から、新しいサーバーのメンバーリストを運用しています。

もし今の段階で、切替えたい [depolibrary-tama:] で始まる件名のメールを受け取っていない方は、登録アドレスを確認しますので、

お知らせください。その前に迷惑メールフォルダに入っていないかもご確認ください。なお『通信』本号の発送後に、第37回多摩デポ講座の案内をメーリングリストで発信する予定ですので、確認していただく目安にもなります。

使い方は今まで同様に簡単です。メーリングリスト用のアドレス宛にメールを送るだけで、登録者全員に一斉送信できます。送られてきたメールに返信するだけでも情報発信できます。

また、『Front』終了に伴い、多摩デポが始まるきっかけとなった「多摩むすび」のメーリングリストも同じサーバーに拠点を置くことになりました。多摩地域を中心に市民、職員の数少ない情報交換の場です。登録は随時受け付けています。

新しいメーリングリストでは、アドレス変更や登録は管理者のみが行います。変更や登録が必要な時は、事務局にご連絡ください。

### 《会計担当から》

「通信」で2回にわたりお知らせしてきましたが、今年度は会を支える財政基盤のあり方について検討しています。前回の「通信」でも報告しましたように、今年度は新たな入会者を迎えることができ、また賛助会費の複数口納入者が増えたり、ご寄付（思いがけない大口のご寄付もあり）やブックレット販売収入が増えたりといううれしい状況もあります。

これを踏まえ、半経経過した時点で今年度の会計状況を点検したところ、おおむね昨年度と同程度の繰り越しをできそうな見通しを

得ることができました。

そこで理事会で議論の結果、当面来年度については会費値上げを見送るという結論になりました。ややほつとしているところではありますが、気が抜けませんが、繰り返しになります。会員の皆さまには、ブックレットを周りの方に広める、入会のお誘いをしていただく、デポ講座へのご参加など、引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

### □ 今号の内容 □

- ・第37回多摩デポ講座の案内
- ・全公図の全国実態調査と第36回多摩デポ講座報告  
事務局長 堀 渡
- ・全公図調査の意義
- ・カーリルとの共同研究報告
  - ・ISBNなし資料同定識別のための実証実験
  - ・TAMALASの改良
- ・メーリングリストのサーバーが変わりました
- ・会計担当から

### ★会の現勢

2019年11月1日現在

●正会員

(個人会員83名)

●賛助会員

(個人44名)

(団体1団体)

●年会費

正会員(個人・団体)  
五千元

賛助会員一口二千元

(個人一口 団体五口以上)